論説

日本考古学における丹生遺跡と早水台遺跡

綿貫俊一

はじめに

日本国内では一九四九年に岩宿遺跡で旧石器を発見して以来、東京武蔵野台地での大規模な旧石器時代遺跡の発掘、東北や関東での前期旧石器捏造事件の発覚等、様々な出来事があった。大分県内ではその間に丹生遺跡、早水台遺跡の「前期旧石器」、聖嶽洞窟、岩戸遺跡の「人骨」、囲ヶ岳洞穴の「壁画」など全国的に話題を提供した遺跡の調査研究が少なくない。なかでも丹生遺跡と早水台遺跡では、日本を代表する考古学者による激烈な議論が行われただけでなく、高松塚古墳の壁画発見以前の日本で世間の耳目を多く集めた遺跡の一つであった。いま直接・間接に関与した学者を挙げると、丹生遺跡が山内清男・小林達雄・佐藤達夫・金関丈夫・国分直一・富来隆・佐藤暁・坂口豊・野田雅之・角田文衛・藤原光輝・早川正一・三上貞二・大西郁夫・酒詰仲男・三森定男・江上波夫・八幡一郎・斎藤忠・鈴木尚・小野忠熙・堅田直・小林知生・松崎寿和・芹沢長介・鎌木義昌・江坂輝弥・賀川光夫が関わり、早水台遺跡には鏡山猛・八幡一郎・芹沢長介・鎌木義昌・江坂輝弥・渡辺誠・賀川光夫・鈴木重治・小田富士雄・金関丈夫・国分直一・富来隆・佐藤暁・藤田等・永井昌文・村田茂雄・角田文衛・小江慶雄など著名な多くの学者がいる。これまで日本の考古学史上かくも多くの著名学者が関わった遺跡の調査があったであろうか。調査に至る過程や調査に関わったこれらの群像の名前を一瞥するだけで丹生・早水台が当時の日本考古学界における重要な問題として認識されていたことが窺える。

歳月の経過とともに旧石器研究の中で起きた出来事の当事者は次第に亡くなってきており、今や調査の経緯は伝説の域に達しようとしている。また考古学関係者のなかに経緯を知らない人も多い。しかも事実と違う伝聞が流布されているという状況となっている。かような事情から筆者は十数年前から丹生遺跡と早水台遺跡に纏わる研究の背景を細々と調べてきた。

今回、内容的には未完成のものを提示しようと思いたったのは、丹生・早水台の調査経緯に関する新たなる情報を得る意図もある。本来は大分県内の考古系雑誌に書き記しておく必要を考えていたが、県内には考古系の雑誌はなく、掲載する場がなかった。大分県の考古学にとってはこのことのほうが差迫った問題点かもしれない。本来、一点の遺物資料の紹介や簡単な報告・論文を大分県内の考古系雑誌に掲載することは地域の歴史や考古学の底上げと励みになるだけでなく、後進の育成等にも繋がる。こうした問題の克服は必要であろう。今回は本誌の紙面を借り、二十世紀後半の九州大分で起きた旧石器時代研究にまつわる出来事に言及し、総括しておきたい。

一　丹生遺跡と発掘調査の顛末

丹生遺跡の調査に先立つ一九五一年・一九五二年、大分大学の富来隆・野田雅之・佐藤暁を中心とするグループによって津久見市徳浦の水晶山にあった堂ノ本洞窟が三次に亘って発掘された。上洞と下洞から石灰華の付着した大量の獣骨と数片のチャートを石材とする石器が見つかったとされる（富来一九六三）。実は同じ年に直良信夫の栃木県葛生町前河原洞穴の発掘や岩宿遺跡の報告書が出版され、発掘に従事した調査員の一人である佐藤暁は「このことが動機となって、直ちに津久見地方の石灰岩洞の分布の調査がなされ、その結果、比較的に調査のしやすい津久見市徳浦の堂ノ本洞窟の調査をおこなった。」という（佐藤一九六三：三二）。その後、大分大学の富来隆を中心とするグループの調査は一九五九年頃発見された丹生遺跡や一九六八年の尾津留洞穴の調査へと続くのである。こうした富来グループの活動に刺激をうけたようで、賀川光夫（当時別府大学）も県南一帯の分布を調べており、このことを筆者は賀川から聞いたことがある。その活動のなかで一九六一年・一九六二年の

南海部郡本匠村宇津々（現 佐伯市本匠）にあった鍾乳洞の聖嶽洞窟を発掘し、「旧石器人骨」と「旧石器」を同一層から検出している。また一九六二年以降、大野郡内で鳥養孝好と大分県立大野高等学校・大分県立竹田高等学校の生徒による踏査や小発掘に繋がっていくが、特に鳥養による岩戸遺跡の確認と芹沢長介による一九六七年の調査に連動している。

さて丹生遺跡の発見は富来隆（当時大分大学助教授・東大出身）等のグループが一九五九年、共同通信の中村俊一が一九六〇年六月には把握していたという（富来・佐藤・藤内・二宮一九六二：一〇二、中村一九六二：一〇五）。そして一九六二年になり、丹生遺跡群が「旧石器時代前期」の遺跡として世に登場することになったのが富来・中村の両氏による二月六日の再踏査であった。富来と中村は発見の報をそれぞれ別の研究者に連絡した。実はこの別々の連絡が、丹生問題混迷の遠因となったのである。すなわち中村俊一は個人の資格で二月二七日に角田文衛（大阪市立大学教授・古代学協会系）に連絡している。同じころ富来隆は自分が所属する大分大学卒業生を中心とした大分県社会民族学会を新たに組織し、富来はその会長名で同会の顧問をしていた金関丈夫と、古代学協会の角田文衛に三月一日付けの書簡を送っている（角田一九六二：七四）。富来は一九六二年一月二一日に金関丈夫・国分直一・筒井清彦・渡辺直経（東京大学）などを顧問とする『大分県社会・民族学会』を組織していたから金関に報告したのである。国分直一も三月四日には大分入りしているので富来は国分にも丹生の石器発見の報告をしたのだろう。富来と中村が角田文衛に連絡したのは、角田の著作である「世界史大系」第一巻に所収された石器の図と丹生の石器がそっくりだったからである。しかも富来と中村から別々に届いた書簡に角田は「両氏ともに現地調査を要望していた」とある（角田一九六二：七四）。金関丈夫はかねてより昵懇にしていた山内清男に「千載一遇の好機到来、急がなければ悔いを残す。」と手紙で連絡しただけでなく（中村二〇〇二：一六五）、今後の方針として日本考古学協会挙げての調査とするために日本考古学協会の委員長をしていた八幡一郎（当時、東京大学講師）にも事情を報告している。

（注）富来は八幡一郎門下である地元の考古学者である賀川光夫には報告していない。これについて筆者は富来隆に連なる野田雅之（現大分県地質学会会長・理学博士）から次のような興味深い話をしていただいたことがある。野田は「富来さんや、佐藤暁、二宮たちは考古学を専門的に習ったことがないので、賀川さんに教えてもらっていた。しかし賀川さんがいいところをとったと思い、嫌気がさして離れていったんだろう」という。筆者は、これと同じことを佐藤暁からも聴いたことがあり、佐藤が一九五九年までに別府大学助手を辞めた理由であったようだ。その後、富来グループは金関丈夫・国分直一・渡辺直経を顧問に迎え共同調査を行っていくのである。

富来隆・佐藤暁を中心とするグループは丹生以外にも櫻灘沿岸地域の「前期旧石器」の分布調査を金関と国分に対する献呈論文集に執筆したり、尾津留洞穴の発掘調査や早水台遺跡の第三次発掘調査に参加したり、一九六二年十月開催の日本考古学協会奈良大会での共同発表を行うほどの親しい関係にあった。またグループのリーダーであった富来が東京大学出身であることもあって、渡辺直経とも交友があったようでグループ員の佐藤暁（当時、日出町教育委員会）が中心となった一九六一年九月の橋詰遺跡の調査に渡辺は名前を連ねている。しかし彼等には膨大な集積資料について手際よく実測図を作製し、まとめる力はなかったようで、グループ活動が自然消滅する一九七〇年代前半に至るまで印刷物が世に出たものはほとんどなかった。

金関丈夫と山内清男の関係は、一九三一年の正月を京都で過ごした山内が金関からドイツ語で書かれたエーベルト著の『先史学事典』（全十五巻）を無期限に借りたり（春成二〇〇三：九六～九七）、一九六八年に金関丈夫の古希記念論文集に寄稿した際にかつて貸与してくれたことに対する謝辞を記したりするなど、その関係は最後まで続いている。こうした経緯で金関は山内に丹生の石器について連絡したのである。

富来グループの顧問である国分直一はいち早く三月四日には遺跡と遺物の調査を行っている。もう一人の顧問の金関丈夫（当時鳥取大学教授）は東大の山内に連絡するとともに自らも一九六二年三月七・八日に丹生台地の視察と中村俊一の自宅で石器のスケッチを行っている（佐藤一九六二・七）。この時の観察から金関は当時インドの前期旧石器文化として知られていた「ソーハン文化」と丹生の石器との関係を考えるのである。一方、金関から連絡を受けた山内清男は自身が病気のため丹生の遺跡と石器についての調査を佐藤達夫（当時、東京国立博物館考古課長）・小林達雄に依頼する。山内が自ら大分に行けなかったのは丁度三月末の定年退官と四月から成城大学への奉職を控えていたこともあるのだろう。ともかく山内の依頼を受け

た佐藤と小林は一九六二年三月十四日から三日間に亘って丹生遺跡の踏査と中村邸での遺物観察を行う（中村二〇〇二：一六五）。このときの新聞報道では三月十六日から試掘する予定だったようである。更に佐藤達夫は、一旦、帰京後の三月二三日から同月二七日まで再び坂口豊（当時、東京大学理学部助教授）を伴って再訪し、地質学的な面からもデーターを収集した。この際の調査結果が一九六二年四月発刊の考古学雑誌に発表されたのである。

金関丈夫・佐藤達夫・小林達雄・坂口豊など山内清男をめぐる研究者が次々と大分入りしているとき、角田は中村の二月二七日付けの書簡と富来からの三月一日付けの書簡を受けながら所属する大阪市立大学の入学試験の為に動けなかった。しかし文化財保護委員会の斎藤忠技官と日本考古学協会の八幡一郎委員長、古代学協会への連絡と打合せを行っていたのである。そして佐藤達夫に遅れること一週間後の三月二〇日に角田と西井芳子（当時、古代学協会主事）・三上貞二・大西郁夫（当時、京都大学理学部地質鉱物学教室）の四人からなる調査団で大分入りし、丹生遺跡での予備的視察と中村俊一邸で石器の観察と実測をしている。このときに丁度富来グループの顧問として国分直一も現地に同行している（写真）。角田は中村俊一や、国分直一、金関丈夫に近い大分大学に連なる富来隆・佐藤暁に協力を依頼しつつ発掘への協力を取り付けたのだろう。更に三上貞二を四月六日・七日に再度大分へ派遣し、新たに中村が発見した石器の実測と第六地区の視察をさせている。角田も西井と伴に四月二日から三日まで大分を再訪し関係者と発掘に向けての打合せと遺跡・遺物の調査を行っている。このときまでに土地所有者である工藤隆夫から発掘承諾書を取得するなど、次々と発掘への布石を打っていたのである。中村と、金関に近い富来のグループも、矢継ぎ早に調査に至る布石を打つ中で既成事実化していく角田の行動力と、角田への二月二七日付けと三月一日付けの書簡で「現地調査を要望していた」ことからすれば正面から断ることができなかったであろう。

（注）一九六二年三月二四日は山内清男の還暦祝賀会の日である。祝賀会に出席した人で、後に多少とも丹生に関わるのは江上波夫、芹沢長介、鎌木義昌、江坂輝弥、斉藤忠、八幡一郎、鈴木尚で、談笑する姿が映し出されている（『画龍点睛』一九九六）。丹生も話題に上ったのであろう。このとき既に角田は八幡一郎から丹生調査の賛意を得ていたのである。

1962年３月21日　丹生遺跡第一地区貯水槽にて－角田が手にした石器を富来が見ている－
左より：某氏、藤内喜六、狭間久(大分合同新聞)、工藤隆夫(地主)、国分直一、大西郁夫、角川文衛、佐藤暁(日出町)、富来隆(大分大学)、森山善三(大分大学)、西井芳子(古代学協会)

古代文化　第８巻　第４号　1962　角田文衛論文より

角田文衛にとって富来隆や中村俊一からの書簡以上の縁がなかった大分県内において両氏の協力を得ることは必要不可欠であった。そうした経緯もあって角田は後日発行された古代文化（第八巻 第四号）に富来グループの『とよ』創刊号に掲載された彼等の報文の転載と、中村俊一の原稿を掲載している。更に彼等の文章に第一発見者・第一発見日が微妙に食い違いを見せているなかで角田自身の報文は両者に配慮した文となっている。しかもその論文には写真付きで、富来は嬉しそうで、中村も誇らしげな上半身を写したものとなっているし、富来グループの佐藤　暁・藤内喜六・二宮昭二の名前も記す細心の注意が読み取れる（角田一九六二・五：七四～七八）。この点は佐藤達夫も同様の配慮をみせている（佐藤一九六二・七）。

こうして山内清男・佐藤達夫・金関丈夫と角田文衛の両グループは丹生遺跡の地質と石器のデータを入手し、考古学協会での発表と主導権の獲得に備えたのである。しかし同一遺跡をテーマにした発表が、同一の学会で発表されることは前代未聞のできごとであった。このため両者は一本化の協議をおこなうのであるが、プライドの激突のなかでは決裂するしかなかったので

ある（一九六二年五月二九日付け大分合同新聞）。

以上の経緯を経て、一九六二年四月二八日からの日本考古学協会第二十八回総会を慶応義塾大学講堂で迎えるのである。しかし丹生遺跡に関する今後の調査については内堀を埋められた大坂城夏の陣前のような状況であって、既に勝負はついていた。まず二八日の総会で山内清男は百二十七票の得票で日本考古学協会の委員に再選されたほか、八幡一郎・芹沢長介・江坂輝弥・賀川光夫等が中心となって立ち上げた洞穴遺跡調査特別委員会が設置され、特別委員にも就任する（中村五郎一九九六：四五）。ついで山内清男が発言を求め、「丹生遺跡は世界的なものであるから、考古学者の全国組織である当協会内に調査委員会をつくって全力をそそぐべきだ。」と提案した。これに対し角田文衛は「日本考古学協会で委員会によって一本化することには賛成だが、まだその時期ではない。協会の事業とする前に、各方面からの調査が必要」とし、「私は古代学協会の中に委員会を設け、これを主体として六月に試掘、十月に本格的な発掘調査をすることにしているのでこれを活用するべきだ。」と主張し、更に発掘予算をとり、仮事務局を大分大学の富来隆研究室に置いたことを明らかにした（一九六二年五月二九日付け大分合同新聞）。

（注）日本考古学協会の開催された四月二八日は「なかなかまとめて論文を発表しない人だ」とか「文献史学者で発掘経験は素人だ」というささやきが流れる中で（中村二〇〇二：一六六）、山内の東大グループと角田の古代学協会グループの研究発表が型どおりに始まったのである。ここで出た流言飛語のうち前者は山内清男で、後者は角田文衛のことであろう。山内は全国的な縄文土器編年の体系をつくりあげたほか、縄文の施文原体を復元したことで知られるなど偉大な業績を残したが、著作物と報告書が驚くほど少ないことでも知られており（佐藤一九七八：二三八、角田一九九八：二一七）、近年ようやく奈文研から報告書が発刊されつつあるところである。一方、角田の著作物のほとんどは仏教考古・平安時代の文献史学・西アジアや南アジアの新石器以降の考古学である（角田文衛先生古希事業会一九八三）。なお、角田の発言にある「委員会」とは古代学協会による「日本旧石器文化研究委員会」のこと。

丹生遺跡の調査計画に関する角田の発言を聞いていた藤森栄一は「会場はとたんに混乱した。賛否両論に分かれ場内は殺気立った。－中略－結局会議は『こんなにはっきりした対立があっては今回に限り、丹生遺跡についての一本化した調査団の結

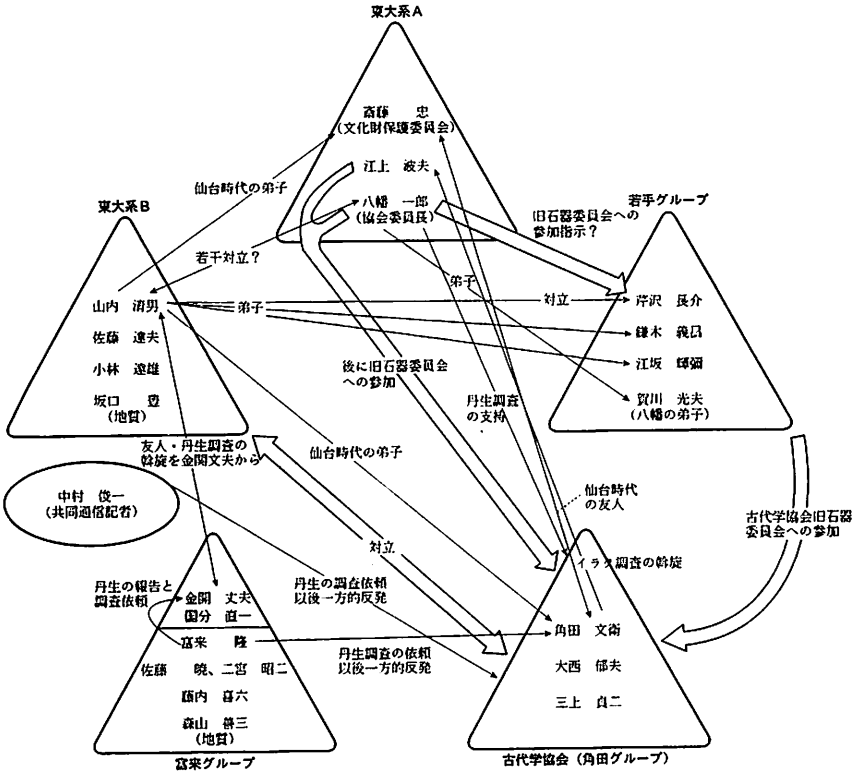
成は無理だろう』ということになり、山内教授の提案は通らなかった。席に着いた山内氏は歯ぎしりしてくやしがり、目がしらをしきりに払っていた。」と記している（藤森一九六五）。芹沢長介（当時、日本考古学協会会員）は「丹生の礫器というものは、かつて紀伊高山寺貝塚の押型文土器に伴出した礫器、さらに大分県速見郡日出町早水台で押型文土器に伴出した礫器などと同じものであり、旧石器時代前期のチョッパー、チョッピングトゥールとは全く異質のものだと考えていたので特別委員会の設置には反対であるという意見を申し述べた。」とあり、更に「筆者の考えが動議不成立の主な原因となったと考えられたらしく、壇上から降りて筆者の横を歩いてこられた山内清男は、筆者の顔をにらみながら『この怨みはきっとはらす』と言い残して去って行かれた。」と受け止めている（芹沢二〇〇三：六、中村友康二〇〇二）。こうして丹生の調査については角田が調査の主導権を獲得し、山内は思いどおりにならなかったのである。そして数時間前に選任されたばかりの協会員と委員の辞任を宣言したのである（中村五郎一九九六：四五）。

このときの様子について杉原荘介は「司会をされたのはだれか忘れましたが、山内先生にかなり不利な司会の方法をとられたと思います。－中略－具体的にいうならあの司会のやり方は不公平だったと思います。」と山内が不運だったことを回想している（杉原一九七七：二五一）。なぜ山内はなりふり構わず激しい言葉を用いながら協会で発言し、角田は「淡々と述べる」という動と静のスタンスをとることになったのだろうか（角田一九九八：二一七）。むろん山内は仙台時代の弟子である角田が着々と調査への布石を打っていたことと、芹沢の発言に対する怒りからくる焦りと意地があり、角田は八幡一郎の言質をとっていたことからくる自信があったからであろう。これを読み解く角田の回想がある。三月に八幡一郎（当時、日本考古学協会委員長）に角田が連絡をとった折のことである。「京都に戻ってから私は早速当協会（日本考古学協会）の八幡一郎委員長に電話し、調査結果を報告した後、今後の調査の方針について協議した。同委員長は、『山内清男君も関心が強く、佐藤達夫君を遣わして調べさせたようだが、これは非常に重要な遺跡であるから古代学協会が全国的に研究者を動員して事を進めたらよい』との意向を示された。わたしもその意見に賛成であって、全国的な体制で古代学協会が研究調査を推進することとしたの

である。」と記している（角田一九九八：二一六）。つまり山内が構想していたのは日本考古学協会主体の委員会方式であるが、角田は既に日本考古学協会トップの了解を得ていたことに起因する自信から「淡々と述べ」たのであった。角田とすれば本意ではなかったようであるが、結果的に考古学協会における討論は強固な山内が自分の思い通りにならないことを理解する手荒い通過儀礼とならざるを得なかった。怒号の飛交うような激しい会議であった分、後世に語りつがれる会議となったのである。こうして丹生発掘調査の主導権を得た角田文衛は大分県教育委員会を通じて文化財保護委員会へ「昭和三七年四月二八日」付けの丹生発掘の申請を提出するのである。要するに角田は考古学協会の席上で古代学協会による調査への流れが決定する四月二八日までまって、既に用意していた同日付けの申請を、ほぼ古代学協会による発掘が確定した当日中に発送したことが申請の日付けから読み取れる。その後、丹生の調査は一九六二年の六月の予備調査から一九六七年の最終調査まで断続的に発掘は続くことになるが、数量的にも、しかも海成層でない古い層からまとまった「前期旧石器」は発見されなかった。

（注）山内は丁度、総会より三五日前の三月二四日（土）に還暦祝賀会があり、その折の出席者のうち、芹沢が後の日本考古学協会総会で反対し、同じく出席者の江上波夫、江坂輝弥、八幡一郎、鎌木義昌、鈴木尚とともに古代学協会の日本旧石器文化研究委員会に参加したことで大きな屈辱感を味わったであろう。

筆者は二〇〇一年十一月四日に大分市坂ノ市の宿で角田文衛から「山内さんは中学の頃から知っているが、報告書を出さず、また資金もないんだ。僕はそれを知っていたんだ。僕には調査や報告書を出す予算の目途があったんだ。」ということを教えて頂いた。同じことは『日本考古学』第六号にも記されている（角田一九九八）。たしかに角田は一九六二年四月の年度当初から古代学協会の調査団（視察）として大分へ来訪すると伴に、六月五日から六月八日までの試掘と十月五日から十月三一日までの第一発掘調査を計画するなど、充分な資金運用のあてがなければならない。その背景には協賛金など相応の資金があったのだろう。濱田耕作以来、京大考古学教室は濱田耕作・末永雅雄と本山彦一（元毎日新聞社社長）、山中商会と梅原末治などの関係で資産家から寄付を受けてきた歴史がある。京大出身の角田もあっさり大阪市立大学の教授職を五十四歳で辞し、梅田忠良、白川静らと財団法人古代学協会を作った背景には出資者を募り得た角田の辣腕によるところが大きい。現在古代学協会の理事を務められている中には大坪孝雄（王子製紙会長）もおり、角



丹生遺跡をめぐる人々の関係

田の幅広い交友関係をかい間見せている。

角田は福島県桑折町出身で、一九二六年に仙台第一中学校へ入学し、一九三〇年四月まで在籍している。角田が丹生の件で相談した斎藤忠はその頃、旧制第二高等学校に在籍しており、同じ頃、伊東信雄も旧制第二高に在籍しており、三人は山内の発掘に参加し指導を受けていたので旧知の間柄でもあった。角田は山内への追悼文の中で、「私は、山内さんの最も古い門弟であった。」とあり、また「山内さんとの関係が破綻したのは昭和十四年四月一日、慶応義塾大学医学部北里記念医学図書館の講堂で－中略－発表したときであった。」とある（角田一九九六）。角田もまた小林達雄流にいえば山内清男から濱田耕作への黄金リレーを受けていたのであるが、後にキャンパスは違うが同じ慶応大学三田の講堂で丹生のことで論争することになるとは夢にも思わなかったであろう。

筆者は丹生の発掘調査概報総括編に記載された丹生調査のための『日本旧石器文化研究委員会』の名簿に「八幡一郎、江上波夫、江坂輝弥、芹沢長介、小野忠熙、賀川光夫、鎌木義昌、堅田直、小林知生、

松崎寿和、鈴木尚、三森定男、など当時の先史考古学者の大半が記載されたなかで、芹沢、江坂、鎌木、八幡、江上、鈴木など明らかに山内に近い人々が多く含まれていた理由が分らなかったのであるが（古代学協会日本旧石器文化研究委員会編一九六八）、右に記したように角田の回想によって理解が可能となった。角田は八幡の賛意をうけ、古代学協会を主体とした全国組織による調査を了解していたことに基づくもので、形式的には全国的に研究者を動員したことになる。

古代学協会の『日本旧石器文化研究委員会』に参加した芹沢・江坂・賀川・鎌木らは八幡と旧知の間柄である。しかし江坂は一九五二年から「古代学」等、古代学協会の出版物に何度か寄稿し、弟子の渡辺誠が後に職員となるなど、角田とも交友関係のあったことが窺える。芹沢は角田等の研究については冷淡な批判を繰り返しているが、一九六二年当時は杉原荘介と決裂して就職浪人の身であり、八幡との関係と、就職のことも考え名前を貸したのだろう。江上は八幡と旧友関係にあっただけでなく、イラク考古総局ナジ・アル・アシル総裁とパイプのあった角田から一九五六年に行われた第一回東京大学イラク・イラン遺跡調査の斡旋を受けていたことも背景にあったのだろう（西秋一九九八）。

なぜ山内や角田は丹生にこだわったのだろうか。山内は丹生以前に旧石器に関する論文は書いていないが、時代・時期区分に大きな関心を抱いた考古学者である。当時の新聞をみると丹生の石器は「日本で初めての旧石器」が出土したという文脈で書かれていた。これは一九四九年・一九五〇年に岩宿が発掘されて以来、丹生遺跡が表舞台に登場した一九六二年までの十二年間には既に全国的に今日旧石器時代と呼ぶ時代の遺跡が見つかっていたが、当時はまだ旧石器時代という名称はほとんど使われておらず、ヨーロッパの概念との違いを示す意味で無土器時代や先土器時代という名称が一般的に使われていた。報道機関は最古とか日本初という枕詞に「旧石器」をつけた見出しを示していたが、その理由は、丹生の石器に用いられた「旧石器」が山内による時代区分に関係していたからである。山内の著名な「無土器新石器時代」説が発表されるのは一九六三年から執筆・編集が開始され一九六四年に出版された『日本の原始美術』である（山内一九六四）。それまでみつかっていた無土器時代・先土器時代遺跡のほとんどは土器を用いていない新石器時代という解釈であった。それに対し丹生の石器は本格的な旧石器時代に属するという。こうした展望を丹生の石器発見を契機として思索したからこそ山内は丹生遺跡の調査にこだわっていたのである。

一方、角田の場合はどうか。角田のことを芹沢長介は「金関先生、山内先生、角田さんは石器の専門家ではないのです。」と酷評するが（貝塚・加藤・鎌木・杉原・芹沢・吉崎・渡辺一九七七）、イタリアに留学した経験からヨーロッパ、中近東、ロシア、日本における膨大な著作を残しており、角田自身が『考古学京都学派』の直系に連なる博学ぶりである。角田には旧石器・中石器に関する著作は多くないが、方法・理論に関する論文や、石器についても博学を示す『世界考古学大系』（第十巻）・『世界史大系』（第一巻）などの著作があり、一九六二年当時で一般に入手可能な書籍で世界の旧石器を概説した本としてはほとんど唯一のものであった。丹生の石器を世界の前期旧石器に通ずるものと理解したのは、角田が芹沢のいうように「石器の専門家ではない」からではない。現代でもフランスに留学経験のある竹岡俊樹が丹生の石器を「前期旧石器」であると主張するように（竹岡二〇〇二）、ヨーロッパ留学組のなかには特別な考え方があると理解が可能である。

古代学協会の設立の趣旨は、「（古代学）協会を通じて濱田先生の学問を真に継承し、梅原教授の主宰する京大の一派とは違った学風を樹立しようと、協賛の言葉を述べられた。」と盟友末永雅雄の言葉を角田が紹介した文によく表れている（角田一九九七）。すなわち京都大学の梅原考古学との対立軸を造り、濱田の学風を再構築継承することに大きな主眼があり、その華々しい事業の一環として一九五九年の平安京大極殿跡の調査、一九六二年の丹生遺跡の調査、一九六八年の古代学協会平安博物館の開設などが位置づけられている。つまり濱田耕作の学風を継承する古代学協会のためもあって「世界最古のカフ文化に匹敵（当時の新聞）」する世界的な丹生遺跡にこだわったと筆者は考える。一九六四年に古代学協会は早水台遺跡の調査を行うが、当初大分県教育委員会との合同調査を断り、経費の掛かる独自調査をおこなっていることもその事を傍証するのである。角田による丹生へのこだわりは、個人の業績を確保しようという意図のもとにおこなわれたものでないことは著作目録をみるとはっきりするし、石器を入手するためでもないことは発掘届を見るとわかる。むしろそこには、古代学協会の運営に伴う実績確保と京都大学に対する実績の確保を睨んだ切実な組織運営者の姿も見えてくる。

（注）力関係で他の人や学生の文章を参考にし、全てを自分が執筆した論文として世に出す人のことをテレビでしばしば聞く。もしそれが事実であれば盗作であり、学生の励みとならない、と筆者は思う。しかし丹生の発掘をめぐって論争した山内清男や角田文衛にそれは一切なかった。山内は丹生遺跡については佐藤達夫・小林達雄・阪口豊との連名であるか、すべてを佐藤に任せている文献もある。また調査担当者の山内が現地にも行かず、報文の作成を全て芹沢長介・中山淳子にまかせた新潟県本ノ木遺跡の事例がある（本ノ木遺跡の場合はその位置付けが山内の時期区分に抵触したため、芹沢との間で本ノ木論争が起きている）。角田の場合は極端で、丹生関係の概報に執筆者名はなく、古代学協会の責任において出版している。角田の著作目録をみると、オリエントや日本の平安時代などに専門領域があり、丹生などの石器関係は僅少にすぎず、個人業績のためでないことは明確である。また角田による試掘調査と第一次調査の発掘届には報告書作成後の遺物保管場所として大分大学学芸研究室が予定されていたことから、石器入手のためでもなかった。しかし富来グループとの関係が冷えこむなかで、遺物の保管は古代学協会へ変更している。そのために遺物の譲与申請を丹念に行っている。当時、この申請を行ったのは大分県内分では古代学協会をおいて他にはない。例えば大分県教育委員会による早水台遺跡の第三次調査の出土遺物は現在東北大学・別府大学と分散しているほか、個人の所有物化し、散逸したものさえある。こうした中で、古代学協会による譲与申請は展示・公開と保管責任の根拠を得る為もあったと好意的に理解したい。かつて日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会で調査された洞穴からの出土遺物は各発掘担当者の所管となっている。仮に日本考古学協会の委員会方式で丹生を調査していたら全国の調査担当者の下に分散した可能性が極めて高い。こうした現実をみるとき、丹生が古代学協会独自で調査されたことは結果的によかったと筆者は思う。調査資料の全ては古代学協会に収蔵されており、希望すれば全ての遺物が観察できる状況にあるからである。

以上の経緯の中で、富来をリーダーとする大分県社会民族学会のメンバーは自らが要請して実現した山内グループと角田グループの来訪により、顧問の国分直一や金関丈夫の面子を潰すことに発展していきそうなことへの心痛があったのであろう。いや山内・金関と国分の面子を潰してしまったと思ったのかもしれない。おそらくそうした思いの中から五月十二日付けの大分県社会民族学会による『声明』がだされたが、日本考古学協会が結論を出した後ではとき既に遅しの観は拭えない。むしろ別の意図があったというべきだろう。声明の内容は、早急に一本化した調査団の結成を望む趣旨の書簡で、これを関係者に送っている。しかし富来らの声明は彼等の顧問に山内に近い金関丈夫がおり、また国分直一が所属していることもあって事実上古

代学協会の角田に宛てたもので、これを受け取った関係者（当然、角田文衛）から中立的ではないという意見もあったことを当時の新聞は伝えている（一九六二年五月二九日付け大分合同新聞）。富来らの『声明』は既に角田が八幡から了解を得、丹生の発掘届を提出していたことをしらなかったのであろうか。これは筆者の想像であるが、角田による事実上の丹生発掘を了解した八幡の見解をおそくとも日本考古学協会終了後までに角田が富来に伝えることで協力を求めたのは間違いないだろう。仮に伝えていなくとも協会の会議を聞いていれば角田が丹生の発掘を手がけることになったのは分かることであり、富来らの『声明』は顔を潰してしまった大分県社会民族学会の顧問である金関・国分に対して、富来グループが角田グループに抗議することで体面を繕うメッセージを送っているにすぎない。このような経緯から分かるように、富来が言わば金関と角田へ別々の調査依頼を出したことで結果的に自ら組織する大分県社会民族学会顧問の金関と国分の顔を潰したという自責の念から声明を出したのであろうが、それは古代学協会の角田文衛に対する反発へと繋がる。

（注）佐藤暁は「……協会席上での一騒動。ひきつづいて、吾々を充分に納得させうる組織をもたぬ発掘調査団による発掘。また、この調査団に関しての不明朗な動きや噂さなど、身をもって経験しなければならなかった。」と角田と古代学協会に対する回想文を記している（佐藤一九六三）。筆者はかつて大分市教育委員会に保管されている富来コレクションに含まれていた富来氏から某氏宛の下書きの書簡を見せていただいたことがあるが、石英などは捨てたとか、発掘は石器目当てだったという角田批判と受取れる内容であった。また富来は丹生台地の石器として「石英石器」も取り上げるが（富来一九六三）、現在の眼で富来に好意的にみたとしても割れ痕一つないものが多く、角田でなくとも自然石と判断できるものである。これに角田が興味を示さなかったことも反発に繋がったのであろう。これは石英系「石器」が「前期旧石器」であるのか否かの論争が勃発することになる早水台遺跡第三次・第五次調査のほぼ一年前、それらの報告が出される二年前のことであった。

二　早水台遺跡と発掘調査の顛末

富来グループによる角田への反発は、丹生以外の調査においては独自の調査へと向かわせている。富来や佐藤暁らの指導的

立場にあった金関丈夫（当時、山口医科大学）・国分直一（当時農林省水産講習所）は、佐藤の協力を得て一九六二年四月から十月まで関門海峡・玄界灘周辺・有明海沿岸で分布調査を行うなど、角田グループと一線を画していた。調査結果は一九六二年十月二七日から奈良市で行われた日本考古学協会で発表された。ほとんどが層位的な裏づけを欠いていたので反応はなかった。更に一九六三年三月二〇日～四月一日、同年九月に金関丈夫・国分直一・富来隆・佐藤暁・野田雅之により大野川右岸の大分市尾津留の尾津留洞窟の発掘が行われた。洞内からは大量の礫器が出土している（佐藤一九六三・六：三二）。

一方、角田も丹生遺跡と比較可能な石器出土地を探索していた。一九六三年九月一四日付け文化財保護委員会宛文書が日出町教育委員会を経て提出された。古代学協会による早水台遺跡の発掘届である。これには日出町教育長と日出町文化財保護委員会名の具申書が添付されていた。具申書の内容は古代学協会の発掘予定地の名義変更が未終了であることと、蜜柑園造成に係る史跡の解除願いが提出されていること、日出町文化財保護条例による指定地であることを主な理由として延期を具申するというものである。これを受けた大分県教育委員会では史跡解除に伴う本調査の方針を固めたうえで文化財保護委員会に進達したようだ。これを受けた文化財保護委員会は大分県教育委員会を通じて事実上の発掘延期を指示し、大分県教育委員会への協力を古代学協会に指導している。指導を受けた古代学協会は十月一四日、大分県教育委員会に中止の申出を行っている。こうした古代学協会側のミスもあって早水台遺跡の調査が延期されたのであって、中村俊一の子息である中村友康がいうような賀川光夫が裏から圧力をかけて中止させたということはないといえる（中村二〇〇二）。古代学協会のミスは再提出可能な些細なものであるが、実際に具申書を起案したと推定される佐藤暁（当時、日出町教育委員会）との関係が前述したように良好でなかったことがマイナスに働いた観はある。

（注）奈良市で開かれた日本考古学協会での国分の発表に対し嘲笑に近い反応であったことが、国分・佐藤にとっては大きなショックであったことを筆者は佐藤暁からきいたことがある。日出町文化財保護委員会委員長であった佐藤悌は佐藤暁の父親に当たる。

こうした経緯を経て一九六四年二月十一日から二一日まで大分県教育委員会主催による早水台遺跡の第三次発掘調査が行な

われた。この調査は大分県教育委員会主催であるため当時大分県文化財保護委員の賀川光夫と賀川人脈の八幡一郎、芹沢長介、江坂輝弥、鎌木義昌、小田富士雄、鏡山猛、鈴木重治、入江英親が参加している。また日出町教育委員会にいた佐藤暁の要望もあったのだろう、佐藤暁と佐藤の人脈である金関丈夫、国分直一、藤田等、永井昌文、村田茂雄（地質）が参加している。これに加え、大分県教委は古代学協会の参加を要請していたが、古代学協会が独自調査の必要から時期をずらして調査を行うことになったのは前述したとおりである。

早水台遺跡発掘は蜜柑園造成と史跡解除に伴うものであっただけでなく、前回調査時に縄文時代早期の包含層から出土した尖頭礫器をヨハネス・マリンガーから下部旧石器時代のものだと指摘を受けていたことから、その解明をも意図していた。その結果、黒土から押型紋土器、上層のローム層中からナイフ形石器、下層の礫混じりのロームから石英系の石を石材とした「前期旧石器」が検出された。この第三次調査の十八日後に角田文衛による第四次調査が、その二十日後に芹沢長介による第五次調査が行なわれた。古代学協会の調査は前年に文化財保護委員会の指導を受けて延期していたものである。発掘当時、日出町教育委員会に所属していた佐藤暁から筆者は「角田さんの掘った後には多量の（石英を石材とする）石器が廃土に散乱していた」ことを数年前に聴いた事がある。このように短期間に続けざまに同一遺跡の調査が行なわれた背景には、全国的な旧石器時代前期の探索ブームの中で現在では想像できない研究上の先陣争いのあったことが窺える。特に第三次調査の調査員であった芹沢は、大分県教育委員会の報告には実測図無しで簡単な写真を提示したに止めているが、自身が主宰した五次調査の報告に三次調査出土遺物の実測図や写真を載せ、三次報告より五次報告の方が先に出版したと先取権の主張までしている（芹沢二〇〇三：九）。

一九七一年、賀川光夫は『大分県の考古学』を出版し、それまで県内で調査・研究された旧石器文化について総括する。すなわち「前期旧石器」問題に係る早水台遺跡については石英系の石が少量であることから一部を人工品とみるが、中川久夫が開析された緩斜面Ⅲ面（下末吉段丘平行）直上に堆積した包含層を「更新世の最終高水準期以後、更新世末の最低海水準期以

前であって、いわゆる最終氷期の極相以前に相当するであろう。」という記述をとらえて時期的考証は芹沢の純考古学的観察という以外にない。」と時期的考証を避けた（賀川一九七一）。中川久夫の報告を丹念に読み解き、時期比定を避けたのは賀川の見識を示している。また古代学協会の調査では地質調査の結果「ビュルム期以前の原地層は流出して再堆積したものだと報告している（古代学協会日本旧石器文化研究委員会編一九六八・八頁）。ともかく早水台遺跡の「前期旧石器」は第五次調査を主宰した芹沢長介によって主導されていくのである。

（注）賀川光夫は加工のある少量の石器は人工品であるとし、年代については保留している。

二〇〇〇年になって筆者は早水台遺跡の「前期旧石器」包含層が約九万年前の阿蘇Ⅳ降下堆積物の上に位置することを（綿貫二〇〇一）、更に二〇〇一年には再検討の結果、約四万年前の九重第一パミス（Kjpl）よりも上位に「前期旧石器」包含層が位置することを論証した（綿貫二〇〇一）。これによって早水台の「前期旧石器」と旧石器時代後期初頭の石器との年代差が縮むことになったが、両者の異和感がきわだつことになった。それは芹沢長介や柳田俊雄によって北京原人の石器や東北の捏造石器（縄文時代の石器だった）にも比定されていた早水台の「前期旧石器」が根拠不十分の「類似」性であったことを露呈した。なお「前期旧石器」であることを支持する清水宗昭（早水台遺跡第六次調査の協力者）の意見は後期旧石器時代以降ではその存在を知らないということが根拠であるが（清水二〇〇六）、筆者は多くの事例があると思う。詳細な文献の渉猟を経た清水の具体的な検討と反論が求められるところである。早水台の位置づけには極めて慎重だった泉下の客となった賀川光夫もそう思っているだろう。

おわりに

二〇〇五年九月、筆者は業務で丹生遺跡の北側に隣接する上辻遺跡の発掘調査に従事した。角田等が発掘した地点を臨むとき、「夏草や、兵どもが夢の跡」の感を深くした。二十世紀後半の一時期、多くの群像がここで夢を追いかけた台地にも開発

の音が響くまでになった。早水台遺跡も同様である。一九六二年の富来隆や中村俊一による発見と、角田と金関への二重の調査依頼がなければ単なる旧石器時代後期から縄文時代早期の遺跡として認知されただろうと思った。

結局のところ、敗戦までの歴史観が否定され、縄文土器の起源、日本人の起源の追求のなかで夏島貝塚や岩宿遺跡の調査が行われたが、この延長上に丹生や早水台の調査も位置づけられる。すなわち、山内清男は無土器新石器以前の典型的な旧石器と考え、角田も当時前期旧石器時代最古の「カフ文化」に匹敵する遺跡と理解したから、あえて古代学協会の総力を挙げて調査したいと思ったのである。その後、角田が丹生を調査し、更に丹生との比較から早水台遺跡の発掘届を提出したことによって早水台遺跡の問題へと連動していく。

両遺跡は日本の「旧石器時代前期遺跡」としては老舗で、大きな話題を提供した遺跡でもある。しかし筆者が言うまでもなく、丹生は縄文時代の礫器との区分の問題、出土層位が新しいという問題、早水台は石器認定の問題と混入の問題、出土層位の年代観の問題、等の克服するべき諸問題を抱えている。このように角田の丹生、芹沢による早水台にも問題を内包するところから「前期旧石器」の全国な支持と研究の広がりはなかった。そして論争が膠着状態になった一九七〇年代を経て、一九八〇年、丹生・早水台の問題を満足させる「座散乱木遺跡」などの捏造遺跡が出現しはじめるのは周知のとおりである。

ところが二〇〇〇年十一月に「前期旧石器」捏造の発覚後、丹生遺跡や早水台遺跡についてはその研究史的なブランドに魅了されてか問題点の克服と地元の旧石器時代後期や縄文時代にまったく精通しないで再び旧石器時代前期と主張する人が依然としているが、それだけでは調査を行った角田文衛や芹沢長介の仕事を凌駕することはできない。つまりそれらの主張に新しいデータに基づく新しい見解はなく、評論家的主張を繰り返しているに過ぎない。丹生・早水台を調査した先学の経験に学ぶとすれば、執拗な調査のもとに石器群として確実な層位から発見することだろう。いつまでも一点の遺物だけは大丈夫だ、という次元では安心して旧石器時代前期・中期の集落景観等の具体像を議論する段階へ向かうことはないだろう。

参考文献

貝塚爽平・加藤稔・鎌木義昌・杉原荘介・芹沢長介・吉崎昌一・渡辺直経　一九七七『シンポジウム日本旧石器時代の考古学』学生社

賀川光夫　一九六一『考古資料―大分県史料』（二十）第六部、大分県史料刊行会

賀川光夫　一九七一『大分県の考古学』雄山閣

佐藤　暁　一九六三「東九州地方の旧石器研究の諸問題」『考古学研究』第十巻第一号、考古学研究会、三〇～三七

佐藤達夫　一九六二・七「大分県丹生の前期旧石器文化」『科学読売』第一四巻第一八号、八七～九二

佐藤達夫　一九七八「山内清男論」『日本の先史文化』河出書房新社、二三八～二五八

佐藤達夫・小林達雄・阪口豊　一九六二「大分県丹生出土の前期旧石器（予報）」『考古学雑誌』第四七巻第四号、日本考古学会

杉原荘介ほか　一九七七「シンポジウム日本旧石器時代の考古学」

清水宗昭　二〇〇六「九州における礫器の伝統と展開」『史学論叢』第三六号、別府大学史学会

芹沢長介　一九六二「波乱の考古学界」『朝日新聞』十二月二三日付け九面

芹沢長介　一九六五「大分県早水台における前期旧石器文化の研究」『東北大学日本文化研究所研究報告』一、東北大学日本文化研究所研究報告

芹沢長介　一九六五「安山岩角礫層の出土の石器について」賀川光夫編『早水台遺跡』『大分県文化財調査報告』第十二輯、大分県教育委員会

芹沢長介（編）二〇〇三「前期旧石器研究四十年」『考古学ジャーナル』第五〇三号、ニューサイエンス社、四～五三

角田文衛　一九六二・五「大分県丹生遺跡―予察概報―」『古代文化』第八巻第四号、古代学協会七四～九二

角田文衛先生古希記念事業会　一九八三「角田文衛博士著作目録」『古代学論叢』角田文衛先生古希記念事業会、七三九～七四九

角田文衛　一九九六・八「山内さんのこと」『画龍点睛・山内清男―没後二十五年記念論文集―』山内清男没後二十五年記念論文集刊行会、七九～八二

角田文衛　一九九七「末永雅雄博士」『考古学京都学派』雄山閣出版、一四七～一五四

角田文衛　一九九八「丹生遺跡の問題」『日本考古学』六、日本考古学協会、二一六～二一七
竹岡俊樹　二〇〇二「大分県丹生遺跡の再検討」『日本旧石器学の再出発三十六人の提言』『SCIENCE of HUMANITY bensei』Vol.40、勉誠出版、一七一～一七五
富来　隆・佐藤　暁・藤内喜六・二宮昭二　一九六二・四「丹生台地における旧石器遺跡群発見の発見概報」『とよ』大分県社会・民族学会、Vol.1-1、二四～三〇
富来　隆・佐藤　暁・藤内喜六・二宮昭二　一九六二・五「丹生台地における旧石器遺跡群発見の経過」『古代文化』第八巻　第四号、古代学協会、百二～百四
富来　隆　一九六三「丹生旧石器について」『大分大学学芸学部研究紀要』第二巻第二号、五一～七四
中村五郎　一九九六「山内清男先生伝記資料」『画龍点睛』山内先生没後二十五年記念論集刊行会、十八～五三
中村俊一　一九六二「丹生遺跡の発見によせて」『古代文化』第八巻　第四号、古代学協会、一〇四～一〇六
中村友康　二〇〇二「丹生文化発見見聞記」『日本旧石器学の再出発　三十六人の提言（SCIENCE of HUMANITY）』Vol.40、勉誠出版、一六三～一七〇
西秋良宏　一九九八「日本の西アジア考古学調査小史」『日本考古学』第六号、一七〇～一八一
古代学協会日本旧石器文化研究委員会編　一九六八「丹生－大分県丹生遺跡発掘調査概報－総括編」古代学協会
春成秀爾　二〇〇三『考古学者はどう生きたか－考古学と社会－』学生社
藤森栄一　一九六五『旧石器の狩人』学生社
山内清男　一九六四『日本原始美術』講談社
綿貫俊一　二〇〇〇・一二「早水台遺跡と中期旧石器時代」『九州旧石器』第4号、九州旧石器文化研究会、一－二二
綿貫俊一　二〇〇一・八「早水台下層石器群は旧石器時代中期に遡るか」『FRONTIER』Vol.3、海部考古学研究会、三四－三八
綿貫俊一　二〇〇四「大分県の旧石器時代研究の歩み」『九州旧石器』第八号、一五七～一五二